

第 2 章

高等学校における 農業教育

第 1 節 農業教育の推移

1. 農業教育の変遷
2. 学習指導要領の改訂と教育課程
3. 農業高等学校等の学科改編
4. 学校農業クラブの活動

第 2 節 生徒募集人員・進路状況の推移

1. 生徒募集人員の推移
2. 進路状況の推移

第 3 節 教員の研究活動

第 1 節

農業教育の推移

1 農業教育の変遷

我が国では、昭和48(1973)年のオイルショックを境として経済の低迷が続いてきたが、昭和58(1983)年頃から始まったバブル経済により一挙に好転した。株価の上昇が続き、地価も異常なまでに高騰した。しかし、このバブル経済は長続きせず、平成3(1991)年を境に崩壊の道をたどった。このような経済状況の中、産業構造はますます複雑化し、第1次産業の就労者人口は減少の一途をたどり、農業は大きな課題を抱えた苦難の時代が続いた。この間、大都市圏の農地の宅地化が一段と進み、減反政策と相まって農地面積も減少し、さらに、諸外国からの貿易の自由化・国内市場の開放の強い要請を受け、日本の農業は大きな課題を抱えた。

一方、本府においては、都市の膨張・過密化・人口集中に伴い、生鮮農産物の安定供給、農地・緑地の保全、人工緑地の造成、都市における構築物への園芸装飾、交流型農業等は年々増加し、他府県の生産農業とは異なった都市型農業へのニーズが高まった。近年、本府の農業も資本装備の充実、設備化、装置化が進み、ハイテク農業へ急速に移行するとともに、花や緑による装飾や緑化及び趣味の園芸等が活況を呈し、関連する産業が拡大している。

また、平成11(1999)年のいわゆる「新農業基本法」により、本府においても農業の再構築を図ることとなった。このような農業を振興させるためにも、さらには、関連産業技術者の育成という点においても、農業教育は大きな役割を担っているものといえる。

しかし、このような社会情勢や農業事情は農業高校を直撃し、卒業者の就農率の低下は避けられない事態となったが、本府においては、農業高校の特色づくりの推進により、農業科の志願者数は毎年募集人員を上回り、昭和43(1968)年から昭和47(1972)年の5か年の減少期を繰り返すことはなかった。一方、農業後継者や農業関連産業従事者の養成を目標としている農業高校へ入学してくる生徒の実態は、ますます非農家の子

供が増加し、農家の子供が減少してきているため、その方向性を一部修正しなければならない状況となった。

昭和60(1985)年2月に理産審から出された「高等学校における今後の職業教育の在り方について」の答申、及び昭和61(1986)年7月に府学教審から出された「本府高等学校における今後の職業教育の在り方について」の答申をはじめ、府教育委員会に設置されていた「農業教育近代化検討委員会」の検討の結果を踏まえた時代のニーズに応える技術革新に対応した教育を推進するため、昭和62(1987)年度と平成元(1989)年度に府立園芸高校と府立農芸高校の農業単独校2校の学科改編が行われ、施設・設備の整備が図られた。

また、入学者選抜の改革が行われ、平成4(1992)年度の入学生から専門学科第一次入学者選抜が実施され、受験機会の複数化が始まったことにより、目的意識が明確で、しかも意欲のある生徒の確保が可能となり、その結果、学業成績が向上するとともに、学校生活が充実化し、就職をはじめ進学においても著しい進歩が見られるようになった。さらに、大学農学部への推薦入学、職業教育担当教員の企業派遣研修、産業界で活躍する外部講師招聘、大阪府産業教育フェア等の積極的な取り組みにより、農業科への志願者数は増加し、入学定員に対して常に高倍率が維持されてきている。

文部省は平成4(1992)年度から平成6(1994)年度にかけ、近年の教育環境や教育に対する考え方の変化に伴い、現状を改め、学校、家庭及び地域社会の教育機能が十分に発揮され、子供の望ましい人間形成を図る目的で学校週五日制試行の研究を進め、平成15(2003)年度からの完全実施につないだ。これに伴い、平成11(1999)年3月に学習指導要領が改訂され、我が国の21世紀の社会の形成者を育成するため、各学校が「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、「生きる力」を育むことを基本的なねらいとして、完全学校週五日制と同時に、平成15(2003)年度から学年進行により実施されることとなった。

2 学習指導要領の改訂と教育課程

(1) 平成元(1989)年改訂の学習指導要領と教育課程

文部省から平成元(1989)年3月に学習指導要領の改訂が告示され、平成6(1994)年度から学年進行により実施されることとなったが、主な内容は次のとおりである。

ア 改訂のねらい(略)

イ 農業教育の目標

従前の目標は、農業における「生産と経営」に重点が置かれていたが、農業における流通経済の発展と農村社会の変化を踏まえ、「農業教育を見直し、農業教育の目標を広くとらえること」となった。また、社会の変化や科学技術の進歩に主体的に対応できる能力と態度の育成を重視して、「主体的に農業の発展を図る能力と態度を育てること」となった。

ウ 科目の構成

農業教育は7分野、9学科が標準的学科として示され、新設科目が8科目、廃止された科目が2科目で、従前の30科目に比べ6科目の増加で36科目となった。

なお、表2.1に農業に関する科目の新旧対照を示す。

表2.1 農業に関する科目の新旧対照表

区分	改訂科目	区分	改訂科目
各学科共通の科目	◎ 農業情報基礎 ◎ 農業総合実習 ◎ 農業課題研究 ◎ 農業工学 ◎ 農業総合	主として林業科、農業土木科に関する科目	測量 土木設計 農業土木施設 農産物加工
		主として食品科学科に関する科目	食品製造 微生物 食品加工 製造機器
主として農業科、園芸科、畜産科に関する科目	作 培 環 農 業 境 業 情 報 業 報 基 業 報 礎 業 報 研 業 報 究 業 報 基 業 報 礎 業 報 研 業 報 究 業 報 基 業 報 礎	主として造園科に関する科目	造園計面 園緑化材 (造園材料) 造園施行・管理
		主として農業経済科、生活科に関する科目	◎ 農業経済 ◎ 農業流通 ◎ 農業生活 ◎ 農業生活 ● 農家経営
主として林業科、農業土木科に関する科目	育林 業 土 林 業 産 林 業 産 林 業 産 林 業 産		

(注) 1 ◎印は新設科目、△印は名称変更科目、●印は今回の廃止科目を示す。
2 各科目の配列は、学習指導要領の科目の配列と同一ではない。

エ 教育課程編成

学習指導要領の告示を受け、平成6(1994)年度からの実施に向けた教育課程の編成作業が始められた。本府においては、これに先立って、平成3(1991)年4月の中教審答申を受けて、平成4(1992)年1月府学教審から「府立高等学校の教育課程の在り方」についての答申が出された。そこには、生徒一人一人が持つ多様な能力や個性を生かすために基礎的・基

本的な内容の指導を徹底し、個性を伸ばさせるにふさわしい教育課程を基本として構想することが示された。各高校においては、これらの趣旨を踏まえて、それぞれの実態に応じた専門学科におけるコース制の導入や多科目選択、農業科目と普通教科・科目との間の教科間選択制の導入などが図られ、特色ある教育課程の編成が行われた。

(2) 平成11(1999)年改訂の学習指導要領と教育課程

文部省から平成11(1999)年3月に学習指導要領の改訂が告示され、平成15(2001)年度から学年進行により実施されることとなったが、主な内容は次のとおりである。

ア 改訂のねらい(略)

イ 農業教育の目標

教科「農業」の目標は、農業各分野の基礎・基本の確実な習得と自ら学び自ら考える力を育成する観点から、①農業各分野の知識・技術の習得 ②農業の意義や役割の理解 ③農業の充実を図る能力・態度の育成の三つで構成された。基本的には、旧学習指導要領の目標と同様であるが、「能力と態度」の内容を具体化し、「主体的、合理的に思考を深め、創意工夫し、実践する力を育成する」という趣旨がより明確化された。

ウ 科目の構成

ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図るため、教育内容を厳選し、同時に産業の動向に適切に対応した教育内容の再編のため、現行の36科目を整理統合し、29科目の構成となった。

エ 農業に関する科目

原則としてすべての生徒に履修させる農業科目は、「農業科学基礎」又は「環境科学基礎」のいずれか1科目及び「課題研究」とされた。このことは、基礎的・基本的な内容を確実に定着させるためには、農業各分野に共通な内容を持つ科目「農業科学基礎」又は「環境科学基礎」、自ら学び自ら考え、生きる力の育成を図るためには「課題研究」が適切であると判断されたためである。また、本府における標準単位数は、次のような経緯により決定された。

- 特色ある普通高校や総合学科で、農業の科目が履修しやすいように、また、農業専門学科においても当該学科に対応する科目以外の科目も履修しやすいように下限を2単位とした。(例えば、園芸科で「食品製造」を履修させる等)
- 上限は、文部省の標準単位数に合わせた。
- 「総合実習」については、農業科特有の科目であり、

ある程度の単位数を履修してこそ、その効果を発揮するものである。また、府内の農業高校においては、現在多くの総合実習の単位数履修をしている実態があるため、下限を文部省の6単位数に合わせ、上限は現在履修されている最高の16単位数とした。

○ 課題研究については、「総合的な学習の時間」との

併用をも考え、下限を3単位数から2単位数とした。

○ 履修上の留意点としては、農業科の当該学科においては、下限を文部省の示した単位数とすることが望ましいこととした。

なお、表2. 2にこれらの農業に関する新旧の科目と単位数を示す。

表 2. 2 農業に関する新旧の科目と単位数

文部省 単位数	大阪府 単位数	現 行 科 目	新 科 目	文 部 省 単 位 数 案	大 阪 府 単 位 数 案	備 考
3～4	2～6	農業基礎	農業科学基礎	4～6	2～6	整理統合 新 設
2～4	2～6	農業情報処理	環境科学基礎	4～6		
6～8	4～20	総合実習	(いずれか一方選択)			
2～4	2～6	課題研究	課題研究	3～6	2～6	
			総合実習	6～8	6～16	
			農業情報処理	4～6	2～6	
6～8	2～4	作物	作物	6～8	2～8	整理統合
4～6	2～4	栽培環境				
4～6	2～4	農業経営	農業経営	4～6	2～6	
6～8	2～8	野菜	野菜	6～8	2～8	
6～8	2～6	果樹	果樹	6～8	2～8	整理統合
6～8	2～8	草花	草花	6～8	2～8	
8～12	2～12	畜産	畜産	8～12	2～12	
4～8	2～8	飼料				
4～6	2～4	農業機械	農業機械	4～6	2～6	削 除
6～8	6～8	養蚕				
6～8	6～8	育林	森林科学	6～8	2～8	整理統合
6～8	6～8	林業土木				名称変更
6～8	6～8	林業経営	森林経営	4～8	2～8	
6～8	2～8	林産加工	林産加工	4～8	2～8	整理統合
6～8	2～4	測量	測量	6～8	2～8	
6～8	6～8	農業土木設計	農業土木設計	6～8	2～8	削 除
4～6	4～6	農業土木施工	農業土木施工	4～6	2～6	
4～6	4～6	農業水利				削 除
3～4	3～4	農業開発				
6～10	2～8	食品製造	食品製造	4～8	2～8	削 除
6～10	2～8	食品化学	食品化学	4～8	2～8	
4～6	2～8	応用微生物	微生物基礎	4～6	2～6	削 除
4～6	2～4	食品製造機器				
4～6	2～6	生物工学基礎	植物バイオテクノロジー	4～6	2～6	削 除
			動物・微生物	4～6	2～6	
6～10	2～10	造園計画	造園計画	6～10	2～10	削 除
4～6	2～10	造園緑化材料	造園技術	6～8	2～8	
6～8	2～8	造園施工・管理				削 除
4～6	2～6	農業経済	農業経済	4～6	2～6	
4～6	2～6	農業会計				削 除
4～6	2～8	食品流通	食品流通	4～6	2～6	
3～4	2～4	食品加工				削 除
4～6	2～6	生活園芸	生物活用	4～6	2～6	
			動物の利用			削 除
			グリーンライフ	4～6	2～6	
		36科目	29科目			

代的な技術を取り入れた学科に転換し、時代の変化に対応した職業人の育成を図ることとなった。施設面では、受精卵移植など優秀な形質を持つ牛の繁殖・飼育を行う実習施設として、畜産生物学実習室、分娩房、子牛育成室、乳牛飼育室、牛乳処理室などを備えた牛舎（476m²）をはじめ、青刈り飼料を発酵させ、優良な飼料として牛に給餌できるようにするためのサイロ（高さ10m）が新築された。

また、付加価値の高い農業生産の技術を身に付け、時代の変化に対応できる職業人を育成するため、野菜園芸作物のハイテクによる育成・栽培及び経営に関する知識と技術を習得した農業経営者、並びにこれに関連する諸分野の業務に従事する技術者を育成するため、平成元(1989)年4月に「農芸科」が「ハイテク農芸科」に学科改編された。

これに伴い、バイオテクノロジーにより野菜の健全育苗・栽培のほか、生育環境の制御により効果的で品質の高い野菜栽培技術などを習得できるようにするための植物生産工場（400m²）が新築された。工場内には、生物学の実験・実習機器を完備した培養苗生産室、ハイテク温室の温度・湿度・肥料濃度・炭酸ガス濃度などをコンピュータ制御できる環境制御集中管理室等が設けられた。

食品加工科においては、学科改編が行われなかったが、最先端のGC-MS（ガスクロマトグラフ質量分析計）等のハイテク分析機器等の導入が図られた。

学科改編後は、志願者数が増加するとともに、目的意識の高い意欲的な生徒が入学するようになった。

なお、府立農芸高校の学科改編に伴う施設・設備の整備状況等は、表2.3～2.5のとおりである。

表 2. 3 学科改編後の施設の整備状況

資源動物科	476 m ² (牛舎) 約 99 m ² (サイロ)	1 棟 5 室 等 1 式
ハイテク農芸科	400 m ² (植物生産工場)	2 棟 2 室

表 2. 4 学科改編後の設備の整備状況

資源動物科	サイレージ取出装置、バーンクリーナー、搾乳機、殺菌機 顕微鏡、恒温そう、冷凍庫等
ハイテク農芸科	自動環境制御装置、水耕栽培実習装置、純水製造装置、 培養機、クリーンベンチ、遠心分離器、顕微鏡、電子天秤等

表 2. 5 学科改編によって新たに導入された専門科目

資源動物科	家畜育種技術、食品流通
ハイテク農芸科	環境制御

(2) 大阪府立園芸高等学校の学科改編

府立園芸高校は、戦後、新制高校として園芸科1学科で発足し、昭和31(1956)年に農芸化学科、昭和38(1963)年に造園科が新たに設置された。その後、これらの学科構成で農業教育の単独校として、20余年間わたりさまざまな教育実践が積み上げられてきた。

しかし、昭和60(1985)年代に入るとバイオテクノロジーやコンピュータなど先端技術の革新がめざましく、農業高校においても時代に対応した教育内容の導入が求められ、前述のように昭和62(1987)年に「造園科」が「環境緑化科」、「農芸化学科」が「微生物技術科」に学科改編された。

「環境緑化科」は、日本庭園や都市公園の設計から施工までを学習する学科から環境を重視するとともに、コンピュータを積極的に活用し、設計等を学習する学科へ変化した。

また、「微生物技術科」は、食品等の分析や加工を学習する学科からバイオテクノロジーを駆使し、醗酵など微生物を活用した食品づくりなどを学習する学科へ転換が図られた。

設備面では、「環境緑化科」にコンピュータ及びCADシステムなどの先端設備、「微生物技術科」に走査電

子顕微鏡やクリーンベンチ、ジャーファメンター、人工気象器、高速液体クロマトグラフ等が整備された。

平成元(1989)年4月には、栽培系学科である「園芸科」が「フラワーファクトリ科」に学科改編された。野菜、果樹、草花、作物などの栽培を中心に学習する学科から草花の栽培及びその装飾を中心にした学科に転換させ、バイオテクノロジーを積極的に学習させるようにするとともに、昭和44(1969)年に設置され、長年培われてきた特色ある園芸デザインコースのさらなる充実化が図られた。特に、野菜、果樹、作物から、草花を中心とした内容に学科改編するに当たって、農場の再編成と教職員の各部門への配置転換が不可欠となり、大幅な改革となった。施設面では、コンピュータ制御のラン専用温室と全国で初めての展示構成を行う温室を組み合わせたフラワースタディーハウス(400㎡)、設備面では環境制御装置、クリーンベンチ等のバイオ関連機器などの充実化が図られた。いずれの学科も改編前に比べ、入学志願者数が増加し、目的意識の高い生徒が入学するようになった。

なお、府立園芸高校の学科改編に伴う施設・設備の整備状況等は、表2.6～2.8のとおりである。

表2.6 学科改編後の施設整備状況

フ ラ ウ ー フ ァ ク ト リ 科	400 m ²	1 棟 (フラワースタディーハウス)
---------------------	--------------------	--------------------

表2.7 学科改編後の設備の整備状況

環 境 緑 化 科	コンピュータCAD(自動設計製図装置)システム等
微 生 物 技 術 科	走査電子顕微鏡、クリーンベンチ、ジャーファメンター、人工気象器、高速液体クロマトグラフ、大量遠心機、高速冷却遠心機等
フ ラ ウ ー フ ァ ク ト リ 科	環境制御装置(LANキット、パーソナルコンピュータ)、クリーンベンチ等

表2.8 学科改編によって新たに導入された専門科目

環 境 緑 化 科	環境計画、緑化材料
微 生 物 技 術 科	微生物基礎
フ ラ ウ ー フ ァ ク ト リ 科	園芸流通、環境制御、情報基礎

(3) 大阪府立貝塚高等学校の学科改編

府立貝塚高校は、昭和16(1941)年大阪府泉南郡貝塚実業学校として創設されて以来、60余年の間に農業科から園芸科へ学科改編を行いながら今日に至っている。その間、地元葛城山の希少植物ヒメユリをバイオテクノロジーを利用して増殖させ山に返す運動、商店街など地元各所に花壇を設置する「貝塚花いっぱい運動」への参加、「貝塚市緑化フェア」への参加をはじめ、地元小学校や少年団への技術指導や講習、その他各種イベントへの花の寄贈など、常に地域と密着した継続的、積極的な活動が進められてきた。

さらに、地元を流れる近木川の水質検査を継続的に行うなど、環境教育にも力が注がれてきた。このような教育実践をとおして多くの生徒が、日頃の学習・実習の成果を地域や社会の中で生かしながら社会性を身に付け、「生きる力」が培われてきた。

平成16(2004)年4月からは、普通科と園芸科がともに総合学科へ改編されるのに伴い、「人」、「自然」、「文化」、「自己の表現」、「情報」の各系列を柱とした「生きる力」と「豊かな心」の育成をめざすこととなった。特に、「自然とともに生きる系列」の中では、園芸科の各施設・設備を活用しながら農業専門科目10数科目を提供し、園芸科で積み上げられてきた農業教育の一端が継続されて行くこととなった。

(4) 大阪府立能勢高等学校の学科改編

府立能勢高校においては、平成13(2001)年度から文部科学省の研究指定を受け、本府初の連携型中高一貫教育についての研究が地元2中学校とともに開始された。この研究のねらいは、中高一貫教育でゆとりある6年間の学校生活の中で計画的・継続的な教育を展開し、生徒の個性や才能を伸長させ、異年齢の生徒が共通の活動を通じて豊かな人間性を育むという理念に基づいている。研究は、既存の府立能勢高校の普通科、園芸科の枠にとらわれることなく、広く保護者、児童・生徒のニーズ、教職員のニーズ、さらには、平成14(2002)年から始まった第四次能勢町総合計画も視野に入れ、地元のニーズに応える内容で進展させ、最終的には総合学科の道を選ぶこととなった。総合学科の系列は四つとし、国際化、情報化に対応するために「国際・情報」(グローバルコミュニケーション)系列、地域性や近隣の福祉施設との連携を考慮した「人間・

福祉」(ヒューマンウエルフェア)系列、能勢の自然を十分に活用し保全するための「環境科学」(エコサイエンス)系列、そして、能勢地域の活性化をめざす目的で、都市住民と里山住民の交流を企画運営できる人材育成のための「食・花・交流」(グリーンツーリズム)系列が設置された。園芸科の教育内容については、「環境科学」、「食・花・交流」の2系列で受け継がれて行くこととなった。

文部科学省の研究指定の3年間は、中高一貫教育の理念を中・高だけでなく、小学校や保育所、幼稚園も視野に入れた小中高一貫教育をとおして人間性を育むという考え方が、地元で定着しつつある。このことは、能勢地域の子供たちを12年間の長いスパンの中で育て、学校関係者だけではなく、家庭、地域がともに教育という分野において連携しようというものである。この試みとして、義務教育と高校教育を合わせた12年間のゆとりの中で基礎・基本の定着を図り、教育課程を接続するため、国語、数学、英語については“NS”(能勢特別)授業と位置付け、中学3年と高校1年で実施し、中学校教員が高校生、高校教員が中学生を指導するという形で始まっている。

このほか、小中高校の教員からなる合同教科会が定着し、現在、12年間のシラバスづくりが進められており、連携は授業だけにとどまらず、基本的な生活習慣の確立から家庭学習に至るまで広範囲にわたっている。

(5) 大阪府立城山高等学校並びに大阪府立横山高等学校の機能統合

平成16(2004)年8月に府教育委員会から「全日制府立高等学校特色づくり・再編整備計画」に基づき、平成18年度入学者募集時から小規模校の募集を停止し、関連学科を設置する府立高校に機能統合させることが公表された。これにより、府立城山高校の園芸科が府立園芸高校、府立横山高校の園芸科が府立農芸高校、さらに、府立横山高校の家政科が府立成美高校にそれぞれ機能統合されることとなった。

また、両校の普通科は、当該通学区域内で普通科を設置する府立高校で継承されることとなった。特に府立城山高校においては、府立園芸高校東能勢分校(昼間定時制)から昭和51(1976)年4月に独立し、園芸科と普通科が設置されていたが、今後、園芸科については、元の府立園芸高校とともに歩むこととなった。

4 学校農業クラブの活動

学校農業クラブは、昭和23(1948)年にアメリカから紹介され、全国各地の農業高校に設置された。昭和25(1950)年11月の「日本学校農業クラブ連盟」の発足をはじめ、その後、その傘下の「近畿学校農業クラブ連盟」などのブロック連盟や「大阪府学校農業クラブ連盟」に準ずる都道府県連盟が次々と発足した。

学校農業クラブの活動は、農業高校の生徒が自主的に農業の学習を進めるものであり、その成果を評価するための級位検定が行われている。各学校ごとの単位学校農業クラブでは初級位と中級位、大阪府学校農業クラブ連盟では上級位、日本学校農業クラブ連盟では特級位をそれぞれ授与することとなっている。

また、各大会において、プロジェクト・意見・課題研究の発表をはじめ、農業情報処理、測量、農業鑑定等の競技など、多岐にわたる内容で日頃の学習成果が競われるとともに、互いが学び合う場となっている。各学校の単位クラブの優秀な成績は、府大会・近畿大会・全国大会へとつながり、それぞれの大会では発表や競技のほかにクラブ員の集いも行われ、他校のクラブ員との交流により、互いの連帯感が培われるなど大きな成果があげられている。本府においても、クラブ員は日々の学校農業クラブ活動をとおして、その目標である科学性・社会性・指導性を身に付けるとともに、プロジェクト学習をとおして、自らの課題を見つけ、自らそれを解決して行く能力を養っている。その結果、「大阪府学校農業クラブ連盟」のレベルは向上の一途

をたどり、近年は近畿大会でプロジェクトA（農業の経営や流通に関すること）・B（技術の改善や普及に関すること）・C（地域の文化や生活に関すること）や意見発表で上位の成績を収め、全国大会でも最優秀賞や優秀賞を受賞するなど、目ざましい活躍をしている。農業情報処理や平板測量、農業鑑定の競技などにおいても日頃の成果を十分発揮し、優秀賞などの受賞に結び付けている。

平成14(2002)年度には第53回日本学校農業クラブ全国大会が京都府で開催されたが、その際、本府をはじめ近畿各府県の学校農業クラブ連盟が全面的に協力し、大会を成功に導いた。

また、平成16(2004)年8月には、本府の担当により箕面市で近畿2府4県の代表を迎え、近畿学校農業クラブ連盟大会が開催された。

なお、平成16(2004)年度からプロジェクト発表・意見発表の発表区分が従来のA（農業の経営や流通に関すること）、B（産業人としての生き方に関すること）、C（地域の文化や生活に関すること）から、A（食糧区分）、B（環境区分）、C（文化・生活区分）へと変わり、発表方法も視聴覚機器、標本、模型に音声、動画を入れるなど大幅に変更された。

このように、「なすことによって学ぶ」という理念を持つ学校農業クラブ活動は、本府においても農業高校における教育活動の基盤となるものであり、積極的に取り組むことにより、農業高校において充実した学校生活の実現はもとより、「生きる力」を育む上で重要な教育実践であるといえる。

第 2 節

生徒募集人員・進路状況の推移

1 生徒募集人員の推移

全日制の課程の農業に関する学科の生徒募集人員と志願者数の過去20年間の推移は、表2.9のとおりである。

この間、昭和62(1987)年4月に府立園芸高校において「造園科」が「環境緑化科」(1学級)、「農芸化学科」が「微生物技術科」(2学級)、農芸高校においては「畜産科」が「資源動物科」(2学級)へと学科改編が行われた。

また、平成元(1989)年4月には、府立園芸高校において「園芸科」が「フラワーファクトリ科」(3学級)、農芸高校において「農芸科」が「ハイテク農芸科」(1学級)に学科改編が行われ、これらの教育実践を実効あるものとするため、必要とする施設・設備の整備が図られ、技術革新の進展に対応する新しい農業教育が取り組まれてきた。

このほか、平成4(1992)年度の入学者から、受験機

会の複数化を図り、目的意識の高い、意欲のある生徒を確保するため、職業学科においては、生徒募集人員の2～4割の範囲で〔平成9(1997)年度からは5割・平成15(2003)年度からは全員〕、2月に専門一次選抜が実施された。このような入学者選抜の改善の成果として、生徒の学業成績が一層向上するとともに、学校生活が充実化し、進学・就職等の進路面において、著しい成果が見られるようになった。

生徒募集人員に対する競争率は、表2.9のように昭和60(1985)年度の1.65倍をピークに平成3(1991)年度の1.14倍へと徐々に低下したが、専門一次選抜の導入により、そのものの競争率は3.59～2.45倍の高倍率を示し、一般選抜においても1.26～1.62倍と安定した志願状況が維持された。しかし、平成15(2003)年度から入学者選抜が専門学科は前期、普通科は後期のみとなったため、今後、志願者数の変化が著しく生ずるのではないかと思われる。

表2.9 大阪府立高等学校の農業に関する学科における生徒募集人員と志願者数の推移 (単位:名・人)

年度	専門一次選抜(前期)			一般選抜(後期)			総括		
	募集人員	志願者数	競争率	募集人員	志願者数	競争率	募集人員	志願者数	競争率
昭和60				612	1,007	1.65	612	1,007	1.65
61				627	912	1.45	627	912	1.45
62				627	953	1.52	627	953	1.52
63				627	869	1.39	627	869	1.39
平成元				627	867	1.38	627	867	1.38
2				612	778	1.27	612	778	1.27
3				600	681	1.14	600	681	1.14
3	178	639	3.59	422	532	1.26	600	1,171	1.95
5	234	583	2.49	366	495	1.36	600	1,080	1.80
6	234	642	2.74	366	530	1.45	600	1,172	1.95
7	218	676	3.10	342	474	1.39	560	1,150	2.05
8	224	776	3.46	336	522	1.55	560	1,298	2.32
9	280	686	2.45	280	374	1.34	560	1,082	1.93
10	280	765	2.73	280	453	1.62	560	1,218	2.18
11	280	787	2.81	283	441	1.56	560	1,255	2.24
12	280	776	2.77	280	417	1.49	560	1,193	2.13
13	280	716	2.56	280	402	1.44	560	1,125	2.01
14	280	712	2.54	280	380	1.36	560	1,094	1.95
15	560	849	1.52				560	856	1.53

(注) 1 「農業に関する学科」を設置する府立高校には、能勢、城山、園芸、農芸、横山、貝塚の6校がある。

2 募集人員及び志願者数は、全日制の課程のみを示す。

2 進路状況の推移

昭和60(1985)年度以降の府立高校の農業に関する学科における卒業生数は、概ね500～430人で推移してきたが、生徒の進路先については、産業構造や就業構造の変化、高学歴化、価値観の多様化、経済不況等の影響を受け、大きく変化してきた。府立高校の農業に関

する学科における卒業生の進路状況の推移は、表2.10のとおりであるが、特徴として、①大学をはじめ短期大学、専修学校への進学希望者が著しく増加した。②経済不況の影響を受け、求人数が減少した。③価値観の多様化により、フリーターをはじめとする不規則の就労を希望する生徒が増えたことなどがあげられる。

表2.10 大阪府立高等学校の農業に関する学科における卒業生の進路状況の推移

年 度	昭和60		62		平成元		3		5		7		9		10		11		12		13		14		15		
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
進 学 者	大 学	24	5	17	4	15	3	11	2	10	2	9	2	20	4	18	4	35	7	38	8	34	7	41	9	55	11
	短期大学	6	1	6	1	11	2	10	2	12	2	16	3	23	5	30	6	26	5	35	7	53	11	23	5	33	7
	専修学校	51	11	48	11	60	12	72	14	62	13	97	21	84	17	94	20	108	23	92	19	114	24	125	27	117	24
就 職 者	348	75	316	72	372	74	367	73	340	71	293	62	273	56	257	55	193	40	180	38	172	36	129	28	176	37	
上記以外の者	35	8	50	11	46	9	40	8	58	12	55	12	89	18	65	14	115	24	129	27	103	22	146	31	99	21	
卒業生数(人)	464		437		504		500		482		470		489		464		477		474		476		467		480		

(出典：大阪の学校統計)

- (注) 1 表中の人数は、全日制の課程のみを示す。
 2 専修学校には、専修学校(一般課程・専門課程)、各種学校、公共職業訓練施設等を含む。
 3 表中の%の合計値のうち、四捨五入の関係で100%にならないものがある。

第 3 節

教員の研究活動

昭和60(1985)年以降の20年間は、社会における高度情報化やハイテク化が進み、コンピュータやバイオテクノロジーなど新しい教育内容を取り入れた農業教育が推進された時期である。

一方、産業構造の変化、農業を取り巻く諸事情の変化、入学してくる生徒の質的な変化や多様化など、農業教育を取り巻く環境も大きく変化してきた。高校においては、平成元(1989)年及び平成11(1999)年に学習指導要領が改訂され、平成6(1994)年度及び平成15(2003)年度から新教育課程が施行された。農業高校においても農業経営者・技術者の育成、体験的な学習を通じた人間教育、農業理解者の拡大など、多面的な教育の取り組みが行われてきた。昨今、少子化時代を迎えているが、農業教育は普遍的な教育力を持ち、時代は変わっても生き物を育てるという教材を中心とした生命の不思議さを学ぶことにより、子供たちの心に多くの感動を与え、生きる力を培うという大きな役割を果たし続けてきた。

本府においても、高校の特色化が進み、農業関連の学科が、総合学科等に再編整備される中、農業教育を今後どのように展開するのが重要な課題となってい

る。その知恵袋のような存在として、農業教育研究会が果たす役割は、ますます大きなものとなっている。

○ 大阪府農業教育研究会の活動

昭和24(1949)年に高校の農業教育に関する研究団体として発足した府農業教育研究会は、歴代の会長を中心とし、会員の資質の向上と農業教育の振興に寄与することを目的として、55年間の長きにわたり多くの業績を残してきた。本会は、府内の高校の農業教育を担当する教員が、毎年、中心となる研究課題を設定し、その解決のための研究活動として、各種の調査・研究、講演会、討論会や会員研究発表会、学習指導研究会(研究授業)などを実施するとともに、園芸・食品製造・造園・畜産の各分科会の研究や見学活動等に意欲的に取り組んでいる。また、機関誌「農研」を毎年発行し、活動状況等を詳細に記録し、保存を図っている。これらの活動をとおして、生徒の学習意欲高め、農業教育をより効果的に進めることや、山積みする諸問題の解決を図ることはもちろんのこと、本府の農業教育の改善・充実を推進していく上で大きな貢献をしている。

なお、本研究会の活動状況の推移は、表2.11のとおりである。

表 2. 11 大阪府農業教育研究会の活動状況の推移

年度	研究課題等	主な研究活動	農研誌
昭和60	魅力ある農業教育への実践	○夏季研修会 「大阪府における今後の農業教育は如何にあるべきか」 (大阪けいさつ会館) 講演 大阪府立大学農学部教授 矢吹萬壽 ○学習指導研究 「野菜専攻」(府立貝塚高校) ○研究発表会(なにわ会館)	71号
61	農業教育の革新と展望	○夏季研修会 「生命工学、農業と安全性の研究について」講義と見学 (住友化学工業KK宝塚総合研究所) ○学習指導研究 「バイオリクター」(府立食品産業高校) ○研究発表会(なにわ会館)	72号
62	農業教育の革新と展望	○農業教育内容検討委員会を3回実施し、本府における農業教育の改善について研究 ○学習指導研究 「農業基礎」(府立能勢高校)	73号

年度	研究課題等	主な研究活動	農研誌
63	本校の新しい動き	○見学研修会（宝酒造中央研究所） ○学習指導研究 「栽培環境」（府立横山高校） ○研究発表会（なにわ会館）	74号
平成元	本府におけるこれからの農業教育はどうあるべきか	○見学研修会「植物工場の開発について」（尼崎市） ○学習指導研究「果樹の組織培養」 「コンピュータでの花壇設計」（府立農芸高校） ○研究発表会「情報処理教育」（なにわ会館）	75号
2	地域の特色を生かした教育	○学習指導研究 「鉢物園芸」（府立園芸高校） ○研究発表会「課題研究」（なにわ会館）	76号
3	21世紀をめざす教育をどのように構築すべきか 1 「課題研究」を効果的に進めるためにどのような指導内容を取り入れたらよいか 2 学習指導要領の実施に向けて教育課程をどのように編成したらよいか	○見学研修会 「情報処理」（岡山ミートフーズ） ○学習指導研究 「情報処理基礎」（府立城山高校） ○研究発表会 「課題研究に関する発表」（なにわ会館）	77号
4	21世紀をめざす教育をどのように構築すべきか 1 「課題研究」を効果的に進めるためにどのような指導内容を取り入れたらよいか 2 学習指導要領の実施に向けて教育課程をどのように編成したらよいか	○学習指導研究 「簡易CADの利用による製図実習」（府立貝塚高校） ○研究発表会 「課題研究」・「新教育課程」（たかつガーデン）	78号
5	激変する社会に対応した農業教育の展開 1 新教育課程をどのように編成したか 2 学校週五日制に伴う農場の管理運営をどのように工夫したか 3 各校の主要な取り組み	○学習指導研究 「課題研究公開授業」（府立食品産業高校） ○研究発表会 「激変する社会に対応した農業教育の展開」（たかつガーデン）	79号
6	生徒急減期をひかえ各校は如何に対応したか 1 どのようなことを教えようとしているのか 2 コース制をどのように組み立てて行くのか	○学習指導研究 「課題研究・作品製作実習」など（府立能勢高校） ○研究発表会 「生徒急減対策・特色ある教育内容」（府教育センター）	80号
7	21世紀に向けた農業教育のあり方 1 魅力ある農業教育の取り組みとは 2 新しい農業教育をいかに展開するか	○農研研修会 「無農薬栽培を可能にするには」（府立農芸高校） ○学習指導研究 「実践例・間伐実習」（府立横山高校） ○研究発表会 「21世紀に向けた農業教育のあり方」（府教育センター）	81号
8	21世紀に向けた農業教育のあり方 1 魅力ある農業教育の取り組みとは 2 新しい農業教育をいかに展開するか	○学習指導研究 「研究授業・協議」（府立農芸高校） ○研究発表会 「21世紀に向けた農業教育のあり方」（府教育センター）	82号
9	府民のニーズに応える農業教育 1 環境・食糧等諸問題に対応する教員の指導力強化 2 学校が持つ教育機能を地域・社会に還元する開かれた農業教育	○学習指導研究 課題研究:「地ビール・バイオ研究・情報処理」（府立園芸高校） ○研究発表会「府民のニーズに応える農業教育」（ホテルアウィーナ大阪）	83号
10	府民のニーズに応える農業教育 1 環境・食糧等諸問題に対応する教員の指導力強化 2 学校が持つ教育機能を地域・社会に還元する開かれた農業教育	○学習指導研究 「総合実習:セル成型苗の鉢上げ」（府立城山高校）	84号
11	「これができる!新学習指導要領」 —「ゆとり」の中での特色ある学校づくり— —生徒の「生きる力」を育むために—	○学習指導研究 「食品化学:食品の着色について」（府立貝塚高校）	85号

年度	研究課題等	主な研究活動	農研誌
12	「こんなことができる!新学習指導要領」 - 「ゆとり」の中で特色ある学校づくり - - 自ら学び、自ら考える力を育成するために -	○学習指導研究 (コース実習フードプロセス系:「製菓実習」(府立食品産業高校)) ○研究発表(府教育センター)	86号
13	「魅力と夢のある農業教育の推進」 - 特色ある学校づくりに向けた新教育課程の編成 - - 開かれた学校づくりの一層の推進 -	○学習指導研究 「食品製造・林産加工:ダッチオープンの使用・竹細工」 (府立能勢高校) ○研究発表(府教育センター)	87号
14	「魅力と夢のある農業教育の推進」 - 特色ある学校づくりに向けた新教育課程の編成 - - 開かれた学校づくりの一層の推進 -	○学習指導研究 「総合実習:特別課外実習・森林環境学習」(府立横山高校) 「マーケティング論」・食品製造機器・食品産業衛生・「バイオ入門」(府立食品産業高校・府立枚岡樟風高校) ○研究発表(府教育センター)	88号
15	「これからの農業教育を考える」 - 新教育課程の実践と特色ある学校づくり - - 学校設定科目及び導入科目の研究 -	○学習指導研究 「農業情報処理:コンピュータの活用・プレゼンテーションソフトを利用して」(府立農芸高校) ○研究発表(府教育センター) 「教科農業における評価研究」(府立農芸高校) 「地域交流について」(府立能勢高校) 「枚岡樟風高校の3年間」(府立枚岡樟風高校) 「高度機器分析装置を使った授業展開」(府立園芸高校) 「タイのラン栽培と流通」(府立農芸高校)	89号
16	「これからの農業教育を考える」 - 新教育課程の実践と特色ある学校づくり - - 学校設定科目及び導入科目の研究 -	○学習指導研究 「3級造園技能士実技検定」(府立園芸高校) ○研究発表会(府教育センター) (府立城山高校)・(府立横山高校)・(府立園芸高校) (府立農芸高校)・(府立枚岡樟風高校)	90号